

公衆衛生学分野



初代教授
柳沢利喜雄



2代教授
辻 達彦



3代教授
鈴木 庄亮



4代教授
小山 洋

義資料に引用させていただき学生に紹介している。

—将来の医療制度がどうなろうと、医師をして患者に経済的に依存せしめるようであってはならない。医師の繁栄が病めるものに依存すべきでなく、将来の医師は同胞が病むことを待つのではなく、いかに健康を保つかを教えるようになるであろう。(Sigerist, 1948) —

1981年(昭和56年)に辻教授は定年を迎え退官され、日本歯科大学教授として転出された。

3) 三代鈴木庄亮教授時代

1981年(昭和56年)、群馬大学医学部昭和37年卒の鈴木先生が、東京大学人類生態学助教授を経て母校の公衆衛生学教授として赴任された。インドネシアにおける健康生態学調査、米国との共同疫学調査などの国際的な視野での研究を進め、国内だけでなく海外からも大学院留学生を迎え入れ育て上げた。

鈴木教授は公衆衛生学分野における新しい教科書の必要性を説き、1986(昭和61)年に東北大学の久道教授とともに「シンプル衛生公衆衛生学」を編集発刊した。2002年からは年度版になって毎年新しい内容を盛り込んで改訂され最もスタンダードな教科書といえる存在となっている。

「五十年史」では1993(平成5)年までの人事が紹介されているが、それ以降の人事面での動きとしては、

1997年(平成9年)、助手として群馬大学教育学部卒の笹澤吉明博士を任用。

1998年、大谷哲也、岩崎 基、宮崎博子の各氏が大学院入学。

1999年、須永ルミ子女史、大学院入学。

2002年、群馬大学教育学部卒の周東和好助手を任用。大学院生大谷哲也、岩崎 基、宮崎博子の各氏が医学博士として卒業。3月、鈴木教授は産業保健推進センターへ所長として転出された。現在、NPO 法人国際エコヘルス研究会を設立し、理事長として活躍されている。

4) 四代小山 洋教授時代

2002(平成14)年、四代小山教授着任。群馬大学医学部を1981(昭和56)年に卒業。直ちに公衆衛生学教室助手、1988年に長崎大学公衆衛生学教室助手、1989年に東北大学衛生学教室講師、1992年同助教授、1998年群馬大学保健学科地域看護学教授を経て母教室に戻った。

2003年、川田智之助教授、日本医科大学衛生公衆衛生学講座教授として転出。周東和好助手が育英短期大学講師として転出。助手として宮崎賀織博士を

1. 教室の沿革

公衆衛生学講座は1949(昭和24)年に開講され、今年(2013年)で64年目を迎えた。医学部が大学院医学系研究科に改組された2003年に、一時、教室の名称が生態情報学分野となったが、2006年にもとに戻し今日に至っている。この間、4人の教授が入れ替り、「群馬大学医学部五十年史」には三代鈴木教授時代の1993年までの歴史がまとめられている。本稿ではこれまでの要点にも触れながら、特に、それ以降の動静について紹介したい。

1) 初代柳沢利喜雄教授時代

柳沢先生は1946(昭和21)年に前橋医学専門学校の衛生学講座教授として赴任され、昭和24年に新たに開講された公衆衛生学講座へ初代教授として迎えられた。

著書として「群馬県公衆衛生実際の諸問題」が昭和28年に県から発行されている。県の専門委員(保健衛生分野)として3年間行ったフィールド調査研究の報告集で、保健所と大学医学部との連携などの提言がなされている。昭和28年、出身大学である千葉大学医学部に公衆衛生学教授として転出された。

2) 二代辻達彦教授時代(561)

1954年(昭和29年)、東京大学医学部昭和15年卒の辻先生が二代教授として着任された。国立公衆衛生院からハーバード大学公衆衛生学部(1951~52年)に留学され、母子衛生学を専攻された。戦後の日本の公衆衛生に米国流の母子保健と疫学の新風をもたらした。多くの行政医、教育研究者だけでなく、公衆衛生マインドを持った実地医家を数多く社会に送り出した。著書に「基礎公衆衛生学」と「統計方法入門」がある。「基礎公衆衛生学」は全20章からなる大著で、御一人で執筆されたことにまず驚嘆させられる。公衆衛生とは何かという章を設け、Winslowの定義(1920):「Public healthとはthrough the organized community effortsによってなされるもの」を紹介されている。他の教科書にはほとんど例がない人間生態学という章を設けられ、「医師が地域社会を洞察する」ことの大切さを説いている。本文中に引用されているHenry E. Sigerist(1891~1957)の言葉などは大変貴重で、今でも講



写真1 2003年度パジャジャラン大学交換交流の学生たちと教室員

任用。大学院生として内科医の田中志子医師と精神科医の田中久医師が入学。事務補佐員として小松美香さん、吉澤知穂さん、研究補助員として城下卓也君を任用。写真1は2003年9月交換学生交流プログラムで来学したパジャジャラン大学学生と小山教授、笹沢助手、宮崎助手、大学院生の田中氏、高畑事務補佐員、小松事務補佐員、医学生鈴木里美さんと早川貴裕君。早川君は研究生のように教室に出入りしMD-PhDコース学生の先駆けと言える存在であった。

2004年、助教授として東京大学人類生態学教室から中澤 港博士を任用。事務員として池田陽子さんを任用。

2005年、笹沢助手、高崎健康福祉大学へ助教授として転出。宮崎助手、退職。高畑事務員および池田事務員、退職。林（須永）ルミ子氏博士号取得。助手として京都大学出身の勝矢陽子女史を任用。助手として北里大学水産学部から小林健司氏を任用。下田久仁子さんを事務員として任用。パジャジャラン大学薬学部出身のRizky Abdulah氏が大学院生として入学。

2006年、小林助手、退職し技術補佐員として再任用。助手として国立がんセンターから大谷哲也博士を任用。六本木直美さんを事務補佐員として任用。秋に行われた日本公衆衛生学会（富山）に医学生2名（原沢君、七尾さん）を連れて参加。七尾さんがポスター発表を行った（写真2）。



写真2 2006年度日本公衆衛生学会（富山）

2007年、大学院にパジャジャラン大学医学部卒のEka Suradji医師が入学。5月、辻教授時代から鈴木教授の転出時まで事務補佐員を勤められた森山千代乃さんが逝去された（写真3は2004年2月に教室に立寄って下さった森山さん）。

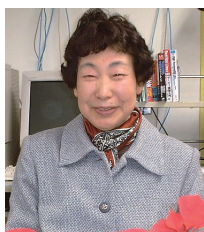


写真3 森山さん

2008年3月、勝矢助教および大谷助教、退職。4月に助教として山崎千穂博士を任用。10月に亀尾聡美博士を助教として任用。大学院にパジャジャラン大学医学部卒のIrma Defi女史、パジャジャラン大

学薬学部講師のMutakin氏が入学。新設された生命医科学修士課程に上智大学数学科卒の山口実穂女史が入学。

2010年、パジャジャラン大学のRahel Fikiran女史が、修士課程に入学。山口女史修士課程修了。2011年、Eka氏博士号取得。2012年、中澤港准教授、神戸大学保健学科教授として転出。Irma Defi女史、Mutakin氏博士号取得。Rahel女史が修士課程終了。10月パジャジャラン大学医学部公衆衛生学教室からリンケージプログラム修士学生として5名を受け入れた。2013年、公衆衛生学大学院年卒の竹内一夫博士が群馬大学健康管理センター教授として赴任した。

最後に、本年（2013年）5月、二代辻教授が逝去された。謹んでご冥福をお祈り致します。

5) 新たな取り組み

(1) 修士課程リンケージプログラム

三代鈴木教授が開始したインドネシア・パジャジャラン大学との交換学生交流をさらに発展させ、パジャジャラン大学医学部公衆衛生学講座のArdini先生とともに2011年にパジャジャラン大学医学部との間に新たな協定を結び、群馬大学とパジャジャラン大学双方から修了証が授与される修士課程のリンケージ・プログラムが開始された。写真4はArdini先生に案内されバンドン市セケロア地区における環境衛生を視察しているところ。



写真4 Ardini先生とともにバンドン市セケロア地区視察

2012年10月、一期生5名が来学。写真5は毎週水曜日に行っている社会医学セミナーにて、リンケージ学生5名および2012年パジャジャラン大学からの交換交流学生4名も含めて医療保険制度の日本とインドネシアとの違いについてディスカッションしているところ。



写真5 社会医学セミナー

(2) 医学部学生のMD-PhDコース

医学部医学科生を対象に平成16年からMD-PhDコースが設けられた。これは、基礎医学や社会医学に関する専門的な教育・研究の指導を学生のうちから行い、PhDの早期取得を促進することを目的に開設されたもので、すでにMD-PhDコース学生として卒業し当教室大学院へ入学した村山侑里女史（D2）を筆頭に、坂井雄貴君（M6）、菅原隆君（M6）、阿部奈々さん（M6）、脇本優司君（M5）、長尾景充君（M5）、山本青葉さん（M5）、



写真6 現在(2012年)の教室スタッフ、博士課程大学院生と医学生

数井真理子さん(M3)、福田怜雄君(M3)が在籍している(写真6)。

2. 教室の特色

1) 教育

公衆衛生学の医学部教育は、以下の4本柱で

行っている。

(1) 3年次「公衆衛生学講義・実習」：保健・医療の社会性について考える機会を提供することを目標に、系統講義、外部のさまざまな公衆衛生の第一線にいる非常勤講師による特別講演に加え、7人前後のグループを編成して実際の保健医療関連施設を見学実習し、成果をお互いに発表しあうという構成で実施している。

(2) 2年次「医学情報処理演習」：臨床や実験や調査で得られる医学関連データについて統計処理ソフトRを用いて解析する手法を演習する。2012年からは各自コンピュータを持参し、プルダウンメニューでRを操作できる「EZR」を実習に活用している。

(3) 5年次「地域保健実習」：学生が各自で実習テーマを見つけ出し主体的に実習を行う。テーマは地域・職場・学校などでの疾病予防および健康管理活動、環境問題とその対策、保健福祉行政とその対応などのほか、プライマリーケアの実践、救急医療システム、医療管理科学、老人医療・福祉、終末期医療、代替医療、へき地医療など多岐に亘っている。年度ごとにすべての学生レポートを冊子にして配布し、全員の発表討論会を行う。

(4) 6年次「保健医療論集中講義」：多くの非常勤講師をお迎えして実施している集中講義で、翌年受験する国家試験の準備も兼ねている。

この他、1年次にオムニバスで行なわれる「生命科学の前線」、「生物学入門」、1年次の「研究チュートリアル」、4年次の「選択基礎医学実習」、「臨床チュートリアル」、5年6年の選択実習、大学院博士課程の「実験基本技術」等を担当している。

2013年現在の教育体制は、鈴木名誉教授、小山教授、亀尾助教、山崎助教で准教授は選考中。客員教授として群馬県衛生環境研究所小澤邦寿所長、非常勤講師として折茂賢一郎西吾妻福祉病院管理者、小笠原一夫緩和ケア診療所いっば院長、桐生康生環境省環境保健部放射線健康管理担当参事官室、小林廉毅東京大学大学院医学系研究科公衆衛生学教授、早乙女千恵子東部保健福祉事務所長、佐藤和子群馬県健康福祉部障害政策課長、瀧上知恵子JR東日本産業医、高山義浩沖縄県立中部病院、津久井智群馬県健康福祉部保健予防課長、長沼誠一長沼内科クリニック院長、中屋光雄前橋市医師会会長、名倉隆夫富士たちばなクリニック院長、藤田晴康赤城病院副

院長、茂木文孝群馬県健康づくり財団診療所長の各位にお願いしている。

2) 研究

(1) セレン・微量元素

Rizky氏は微量元素セレンの生体影響について検討し、食品中セレン含有量の測定を行い日本における食品中セレン含有量の特徴(Int J Food Sci Nutr. 2005)、セレン補充による血液流動度を高める作用(Biol Trace Elem Res. 2006)、そのメカニズムとしてのプロスタグランジン代謝への影響(Thrombosis Res. 2007)を明らかにした。化学形ごとのセレンのがん細胞に対する作用についてレビュー(J Trace Elem Med Biol. 2005)を行い、自らもセレンメチルセレンシステインによる前立腺がん細胞へのアポトーシス誘導作用およびそのメカニズム(BMC Cancer, 2009)を明らかにした。この研究も含め広汎なレビューを行い国内外の知見(Int Oncol. 2011)としてまとめた。またセレンと流産との関連についてもインドネシアにて疫学調査を行っている(Biol Trace Elem Res. 2013)。

Eka氏は、セレンによるマラリア原虫のアポトーシス様細胞死について研究を行い(Parasitology 2011)としてまとめ学位を取得した。Irma Defi女史はリハビリテーション部との共同研究の成果として手術後に起きる急性期炎症反応とセレン栄養状態との関連を明らかにした(Biol Trace Elem Res. 2011)。Mutakin氏はセレンとメタボリックシンドロームのアドipoサイトカインとの関連をあきらかにした(J Trace Elem Med Biol. 2013)。小林氏はHLC-ICP-MSを用いた血清セロプラスミン含有銅の定量法の開発を行った(Biomed Res Trace Elements, 2007)。鈴木教授時代の大学院生であるIda F Rivai女史はその後当教室と共同研究を続けており、ランポンにおけるカドミウム曝露量を(Japan-Indonesia Academic Symposium 2008)で発表した。

小山教授は、血清セレンタンパク質であるセレンプロテインPの分別分析法を確立(Am J Clin Nutr. 1996)した上で脳血管疾患発症リスクに関するフィールドでの疫学調査結果(Nutr Res. 2009)、セレン欠乏症状を呈した患者におけるシステイン含有製剤のセレン代謝に及ぼす影響(Eur e-J Clin Nutr Metabolism, 2007)などを発表し、学会からの依頼総説として「セレン補充によるがん予防と糖尿病発症リスク」(日衛誌2013)をまとめた。

セレン・微量元素に関する現在進行中の研究としては、大学院Miasari氏らはセレンと脂質代謝、特にHDLのアポタンパク、Irma氏らはセレン補充による放射線がん治療における副作用の低減、リンケージ学生のNovian氏らはセレンと糖尿病との関連について糖尿病モデルマウスを用いてのin vivo研究、Rusiati栄養士は緑豆を用いたセレン強化食料の開発、亀尾助教らは「カドミウム汚染地域住民

の骨代謝異常及びイタイイタイ病関連資料に関する研究」、山崎助教らは「微量元素セレンの放射線照射に対する二重効果：正常細胞保護作用と放射線治療補助効果」、その他、インドネシア大学 Ingrid 女史とのプロバイオティクスと微量元素との健康影響に関する共同研究、パジャジャラン大学 Rizky 氏との共同研究「霊長類食餌による疾病予防」などを行っている。

(2) 抑うつ状態のスクリーニング調査と社会環境要因

鈴木教授らが開発した質問紙健康調査票 THI に含まれているうつ尺度 (THI-D) を用いて、群馬県内の職域と地域で抑うつ気分についてのスクリーニング研究を行っているが、その成果としては、山口実穂らによる「労働者における抑うつ状態の因子構造の性差」(北関東医学雑誌2009) および村山侑里らによる「群馬県農村部における抑うつ状態とライフスタイル要因との関連」(北関東医学雑誌2012)がある。それぞれ、抑うつ状態に関わる要因は、性・年齢や正規／非正規社員ごとに因子構造に特徴があることを明らかにしている。

うつスクリーニング調査に関しては、小山教授らの基盤 B「うつ質問票と光トポグラフィによるうつ病の類型化およびセレン栄養状態との関連」が進行中である。

(3) QOL と医療保険制度、地域活動、社会環境要因
リンケー学生 Nora 女史と Dea 女史はインドネシアにおいて住民の QOL についてフィールド調査を行い、それぞれ、地域活動との関連および、保険医療制度との関連について検討を行っている。特にインドネシアでは、地域社会づくりが活発に行われており、住民の QOL にも良い影響を及ぼしている。

(4) その他

大学院生が行ってきた研究として、田中志子女史は施設入所高齢者のケアについて実践的な研究 (Arch Gerontol Geriatrics, 2009) で学位を取得した。田中久氏は鈴木前教授の「こもいせ」疫学データを用いてうつ症状発症に関連する生活習慣因子について分析 (BMC Psychiatry, 2011) を行い、学位を取得した。宮崎有紀子氏は日本におけるセレンの栄養状態の特徴についてのフィールド調査を論文発表 (J Nutr Sci Vitaminol. 2004) し、学位を取得した。

スタッフの研究では、大谷助手は喫煙の社会的依存性に関する新しい質問紙の妥当性および信頼性について検討を行い発表した (Ann Epidemiol. 2009)。リンケー学生 Dian 栄養士は糖尿病モデルマウスを用いてインドネシアの食材 Aruk rice の糖尿病予防効果についての研究を行っている。

3. 社会活動・その他

1) 学会活動

国際学会では、国際微量元素学会と国際セレンウム学会を重視している。写真 7 は 2011 年にトルコで行われた国際微量元素学会 (小山教授、亀尾助

教と大学院生の Mutakin 氏、Irma Defi 女史と共同研究者のインドネシア大学 Ingrid 先生)。

国内では、日本公衆衛生学会、日本衛生学会、日本微量元素学会、日本産業衛生学会に参加している。

2) 社会貢献

群馬県保健福祉部 (前：衛生部) との関係は、初代柳沢教授時代に築かれ綿々と受け継がれてきている。柳沢教授は、「公衆衛生学が群馬県民の健康問題の解決のための学問的裏付けとならねばならない」と記されている。二代辻教授も三代鈴木教授も県の多くの委員会の委員を委託されてきた。現在、小山教授は、がん対策推進協議会、群馬県保健医療対策協議会、自殺防止対策連絡協議会の各委員を務めるとともに、保健予防課のがん対策推進計画策定部会長として「がん対策推進計画」の策定およびその進捗評価を行っている。

その他、地球環境研究企画委員会 (環境省) 第 1 研究分科会委員として申請された研究内容の審査、群馬労働局の労働衛生指導医として県内労働衛生の指導・助言、その他、財団法人群馬県健康づくり財団理事、労働福祉事業団 群馬産業保健推進センター理事等を務めている。

3) 教室内の催し・特色等

パジャジャラン大学との学生交換交流プログラム。2009 年の春 Ida 女史が来学され、歓迎パーティを開催した。

4. 未来展望

健康は、個人の努力だけでは保ち得ない。この考えが公衆衛生学の基本であると思う。臨床講座も含めて様々な学問分野との連携による学際的な共同研究、海外の研究機関との国際共同研究・国際保健、地域 community 主体の地域保健を追求していきたい。

二代辻教授が、著書の中で「我が国には公衆衛生学の大学院、すなわち、School of public health がなく、国際的な人材育成の面で社会貢献ができていない」と嘆いておられたが、リンケープログラムの開始によって国際的な教育機関としての夢の一旦が実現できたように思う。また、初代柳沢教授からの宿題である保健所と大学医学部との連携を是非具体的なものとして実現させたい。県内でも国際的にも健康のための地域社会づくりを推進し、こうした活動を積極的に行うことによって、医学部における学生教育、すなわち、公衆衛生マインドを持ち、地域社会を洞察し。地域をエンカレッジできる医師の養成という使命を果たして行きたい。

(小山 洋)



写真 7 国際微量元素学会2011 (トルコ)